様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ２７ 日現在

機関番号：３２５１０
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ１３０９３

研究課題名（和文）分断社会における〈不良少年〉像の解明

研究課題名（英文）Study on the image of delinquents in contemporary Japan

研究代表者
知念　渉（Chinen, Ayumu）

神田外語大学・グローバル・リベラルアーツ学部・准教授

研究者番号：００７４１１６７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、1990年代以降の〈不良少年〉に関する言説の特徴を分析し、分断社会という状況の改善・解消の方途を探ることを目的としている。そのために、新聞記事およびインターネット上の書き込みに対して、計量テキスト分析を行うとともに、人々が日常生活のなかで交わす会話のなかの〈不良少年〉言説を分析する方法を検討した。その結果、1990年代以降は〈不良少年〉が教育可能な存在として位置付けられなくなっている可能性があること、インターネットでは〈不良少年〉が「地域」イメージと結び付けられて表象されていることなどが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の成果の学術的意義は、以下３点にまとめることができる。第一に、1990年代以降の非行や不良少年に関する言説の特徴を明らかにし、教育可能な存在として捉えられなくなっている可能性があることを指摘したことである。第二に、新聞記事に分析対象を限定することによって看過されてきた不良少年言説と地域イメージの結びつきを明らかにしたことである。第三に、日常生活のなかにある不良少年言説を分析する方法・視座を切り開いたことである。これらの知見は、現在の日本で排除されてきた青少年をどのようにすれば社会に包摂できるのかという政策的支援の構想に生かすことができるという点で社会的意義を有している。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study was to analyse the characteristics of the discourse on juvenile delinquents since the 1990s in order to find ways to improve and resolve the situation of a divided society. I conducted a quantitative textual analysis of newspaper articles and internet posts, and examined methods for analysing the discourse of delinquents in people's daily conversations. As a result, I found that since the 1990s, that "delinquents" may no longer be positioned as educable, and that "delinquents" are represented by associating them with images of the "local area" on the internet.

研究分野：教育社会学

キーワード：非行　少年犯罪　計量テキスト分析

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

現代日本では、ヘイトスピーチや生活保護バッシングといった現象に象徴されるように、外国にルーツのある人々や貧困者を排除する言説が顕在化している。このように民族・文化・階層の異なる人々の間に亀裂が生じている状況から、現代日本は「分断社会」と形容される。こうした状況に対して、ヘイトスピーチや生活保護バッシングに関する研究が蓄積されてきた。本研究は、これらの研究と問題意識を共有しつつ、2000 年代以降の〈不良少年〉をめぐる言説の特徴を明らかにするものである。なお、ここでいう〈不良少年〉とは、「不良少年」だけでなく、「非行少年」や「ヤンキー」、「DQN」などの言葉を包括する概念である。

1990 年代までの〈不良少年〉をめぐる言説を扱った研究によれば、学校や家庭に敵対する者へのレッテルとしての〈不良少年〉は、1990 年代にリアリティを失った（桜井 1997 など）。ところが、2000 年代以降、インターネット上では、〈不良少年〉を「DQN」（ドキュン）と呼んで蔑視・嘲笑する言説が台頭している。つまり、1990 年代にリアリティを失った〈不良少年〉をめぐる言説は、2000 年代になって人々のリアリティを獲得し、再び語られるようになっているのである。しかもそこには蔑視・嘲笑的な言説が含まれており、分断社会と呼びうる状況が刻印されている。

２．研究の目的

2000 年代以降の分断社会と形容しうる日本社会において、〈不良少年〉はどのように表象されており、それ以前の時代と比べて、どのような特徴を有しているのか。本研究では、新聞記事やインターネット、雑誌の記事などを分析対象として、この問いを明らかにすることを目指した。それによって、分断社会という状況の改善・解消の方途を探ることが本研究の最終的な目的である。

もっとも、研究を進めていくなかで、実際の人々の生活のなかにある〈不良少年〉言説を分析する方向に対象を広げることを試みた。そうすることで、2000 年代における〈不良少年〉言説の特徴を解明することによって分断社会という状況の改善・解消の方途を探るという本研究の根底にある目的を達成できると考えたからである。詳しくは後述する。

３．研究の方法

本研究では、新聞やインターネットの記事のデータベースを構築し、それらを対象にして、計量テキスト分析を行った。後述するように、インターネットの記事を分析していく中で、〈不良少年〉を指し示す言葉と、「地域」という言葉が結びついていることが明らかになった。〈不良少年〉に関する言説が、具体的な「地域」を指し示す言葉と結びついているということは、よりローカルな人々のやりとりに目を向けなければならないことを示唆している。なぜなら、日本全国に流布する新聞や雑誌の記事、あるいは全国の読者を対象にしたインターネットの記事では、特定のローカルな「地域」を話題にすることは読者の獲得につながらず、避けられる傾向にあると考えられるからだ。

そこで本研究では、研究開始当初に想定していた研究の方法を修正し、実際の人々の生活のなかにある〈不良少年〉言説を分析するためにはどのような理論や方法を用いることが適切なのかを検討することも行った。

４．研究成果

本研究で得られた成果は、大きく分けると以下の３点である。

第一に、〈不良少年〉に関する先行研究や新聞記事を整理して、戦後日本における〈不良少年〉をめぐる言説を整理した。図は、「ヤンキー」および「ツッパリ」という語を含む新聞記事数（朝日新聞データベース「聞蔵Ⅱ」からデータを収集）の経年推移を示したものである。この図からわかるように、「ヤンキー」という語を含む新聞記事数は、2000 年代になって増加している。この新聞記事の推移から、2000 年代以降の日本社会は、〈不良少年〉に関して、饒舌に語るようになっていると考えることができる。

このような作業と同時に、戦後日本における〈不良少年〉の研究の知見を整理した。その結果、それらの研究は、①独特のスタイルやそこで共有された象徴体系に着目する研究（＝若者文化としてのヤンキー）、②学校での彼らの振る舞いや学校に対する意味づけに着目する研究（＝生徒文化としてのヤンキー）、③彼らの文化を特定の階層文化として捉える研究（階層文化としてのヤンキー）である。なお、これらの知見をまとめて出版した知念（2018）は、日本教育社会学会第８回奨励賞（著書の部）を受賞し、高く評価された。

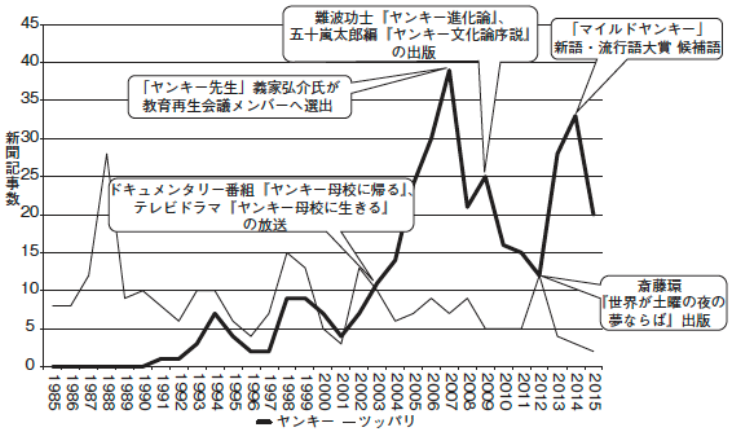

図.「ヤンキー」「ツッパリ」に関する記事数の経年推移
（出典：知念 2018）

第二に、新聞記事に「非行」を含む新聞記事を、朝日新聞のデータベース「聞蔵Ⅱ」および読売新聞のデータベース「ヨミダス歴史館」から検索し、1990 年以降の〈不良少年〉言説に関する新聞記事のデータベースを構築した。まだ分析の途中ではあるが、計量テキスト分析の結果、〈不良少年〉に関する言説は、時代ごとに特徴があることが明らかになった。すなわち、1990 年から 1996 年頃は学校教育の問題に言及する記事が多く、1997 年から 2000 年頃は少年法改正の問題に関する記事が顕著に多いこと、そして、2000 年代になると、「施設」や「送致」、「少年院」「家裁」という言葉とともに「非行」という言葉が語られる傾向にあることがわかった。「非行」という用語が「学校」や「家庭」といった言葉との結びつきを弱めると同時に、「施設」や「送致」という言葉との結びつきを強くしていくというこの 30 年間の変化は、〈不良少年〉の教育可能性が閉ざされていく過程として考えることができる。この知見は、2019 年の教育社会学会第 71 回大会ですでに報告しているが（知念 2019）、より洗練させて論文化する予定である。

第三に、インターネット上での〈不良少年〉言説の特徴を検討した。動画サイトにアップされた動画へのコメント欄を対象に計量テキスト分析を行なったところ、「親」や「学校」という用語よりも、県や市などの地域名が頻繁に言及されていた（Chinen 2018）。もちろん、一つの動画へのコメント欄の分析結果であり、インターネット上での〈不良少年〉言説全般にこの知見が当てはまるというわけではない。しかし、特定の地域への侮辱的な表現を慎重に避ける新聞記事を対象にした分析では見逃されてきた視点であり、重要なもののように思える。言い換えれば、社会に流布する〈不良少年〉言説は、地域イメージと密接に結びついているにもかかわらず、これまでの先行研究では、新聞記事を対象にしてきたことによって、その事実を看過してきたのである。

この第三の知見から、インターネット上の言説を分析すること以上に、日常生活のなかにある人々の〈不良少年〉言説（会話など）を分析することの方がより重要な研究課題となるのではないかと考え、その方向で分析を展開するには、どのような研究があり得るのかを探った。不良少年たちの生活や文化が地域の産業構造と結びついていること（知念 2020）や、フランスの社会学者である P. ブルデューによる「民衆」や「庶民階級」に対する分析がその参考になることを確認した（知念 2022）。

このようにして、本研究では、1990 年代以降の〈不良少年〉言説の特徴を分析して明らかにすると同時に、新聞やインターネットの言説を分析することの限界も確認できた。今後は、これらの知見を発展させたさらなる研究を行い、研究成果を文献にまとめて公表していきたい。

参考文献

知念渉，2018，『〈ヤンチャな子ら〉のエスノグラフィー：ヤンキーの生活世界を描き出す』青弓社。

Chinen, Ayumu., The Discourse on DQN on the Internet, Media Education Summit 2018, Hong Kong Baptist University, 2/11/2018.

知念渉，「非行少年言説の脱心理主義化？」『日本教育社会学会第 71 回大会』大正大学，2019 年 9 月 12 日。

知念渉，2020，「〈ヤンチャな子ら〉の「男らしさ」を捉えるために：ポストハマータウン研究における男性性の位置」『現代思想』48(6)，pp.204-214.

知念渉，2022，「ブルデューの被支配層の捉え方とその応用可能性」『教育社会学研究』第 110 集（印刷中）。

桜井哲夫，1997，『不良少年』筑摩書房。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 知念渉	４．巻 48-6
２．論文標題 〈ヤンチャな子ら〉の「男らしさ」を捉えるために	５．発行年 2020年
３．雑誌名 現代思想	６．最初と最後の頁 204-214
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 知念渉	４．巻 110
２．論文標題 ブルデューの被支配層の捉え方とその応用可能性	５．発行年 2022年
３．雑誌名 教育社会学研究	６．最初と最後の頁 （印刷中）
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　5件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 知念渉
２．発表標題 非行少年言説の脱心理主義化？
３．学会等名 教育社会学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Kyounghwa Yonnie Kim, Kosuke Yoshinaga, Seongsoo Baeg, and Ayumu Chinen
２．発表標題 Digital literacy in higher education: From Japanese cases
３．学会等名 Media Education Summit（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 知念渉
２．発表標題 〈ヤンチャな子ら〉のエスノグラフィー
３．学会等名 〈生活-文脈〉理解研究会シンポジウム　ヤンキーと教育（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 知念渉
２．発表標題 〈ヤンチャな子ら〉の男性性と暴力
３．学会等名 ホワイトリボンキャンペーン　講演会（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 知念渉
２．発表標題 大学を経由しない生き方：〈ヤンチャな子ら〉への調査から考える
３．学会等名 千葉県私立大学短期大学協会秋季総会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 知念渉
２．発表標題 〈ヤンチャな子ら〉にとっての学校：調査から見えてきた学校教育の課題
３．学会等名 神奈川県人件教育研究大会（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 知念渉
２．発表標題 〈ヤンチャな子ら〉の大人への移行と男性性
３．学会等名 一橋大学ジェンダー社会科学研究センター　公開レクチャーシリーズ　第49回（招待講演）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計1件

１．著者名 知念 渉	４．発行年 2018年
２．出版社 青弓社	５．総ページ数 276
３．書名 〈ヤンチャな子ら〉のエスノグラフィー	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関